

創立60周年
since 1962

東京バッハ合唱団 月報

[第723号] 2022年9月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.723

September 2022

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

トルストイの『戦争と平和』——真価の高い芸術

大村 恵美子 (主宰者)

私は、自分の人生のことで、すべて過去のことを早々と忘れてしまう情けない人間だが、読書についてもまさにその欠点に災いされて、同じ本を何度も読み直すことになる。トルストイは、おそらく私の最愛の作家なのだが、最近の世界情勢が、どうもトルストイ作の『戦争と平和』の舞台と酷似しているように感じられて、また取り出して読んでみた。

その結果、本当にその通りで、びっくりしながら現在も、この分厚い長編を、なるべく丁寧に読み返しているところである。

新潮文庫の解説に書いている工藤精一郎の文章を、ここに少し引用させていただく。

「1869年5月、この長編はついに完成した」

「軍の意思を無視して、自分の意思に従わせようとしたナポレオンが、結局は敗れ、民衆の意思の声を心の耳で聞き、軍の気分を正しくとらえて、それに従ったクトゥーゾフが勝利を得たのである。そしてトルストイは真の歴史は、子供を生み、育て、働き、苦しみ、喜び、善意や邪心、あらゆる美德や悪徳を持つ数百万の民衆の生活から成り立つものである、という考えに達した」

「(この作品の) 基本的テーマは**分裂と結合**であると解釈もある。いっさいの偽善、(……) 征服欲、野心、出世欲、利己心、傲慢などは**分裂**の要素であり、ナポレオン、軍の上層部、貴族階級の大多数の人々がそれである。兄弟愛、簡素、善、真美などは**結合**の要素であり、クトゥーゾフ、民衆、民衆の心に溶け合う人々がそれであり、特にナターシャは**結合**の要素の最も美しいあらわれである。そして(……) 作品の前半は**分裂**のテーマが前面に出て、人生の真美を求める人々が幻滅を味わい、後半で国民戦争という異常な事態の中で**結合**のテーマが美しく歌い上げられているということができよう」

「『戦争と平和』は、人物たちの精神的発達、生活、友情、愛、家庭など、いっさいの個人生活の面が、歴史的な面と有機的に結びついている、文学史上に前例のない作品、ロシア精神を讃美する国民的叙事詩であり、世界文学史上にそびえる巨峰であるとされている」



■千葉寫真館新作展「センニンソウ (仙人掌)」[2022/8/16、千葉光雄]

さて、私たちの今生きている世界は、コロナ蔓延の重荷から始まって、何から何まで鬱陶しい毎日を強いられているため、自殺者の多さも顕著とのこと。私たち自身は、そんな中で、バッハのカンタータを日常的に歌うグループをなしているのだから、絶望を免れているように思う。真価の高い芸術こそ、こんな時の人生の救いとなることが証明されるのである。

睡眠時に毎日のように夢を見る私だが、また昨夜の夢の中でも、ずーっと鳴り響いていたのは、先の公演で取りあげたバッハのカンタータ 21 番、《われは憂いに沈みぬ》第 2 曲ソプラノ・アリア「嘆きと涙 憂い 悩み」のオーボエ・ソロの旋律だった。

芸術は、こんな具合に、人生の困難な闇の場面にも、私たちに死への招きから実際に保護してくれるのである。私は、我田引水ではなく、バッハなどの真価の高い音楽が、私たちに豊かな生命をもって、人生の苦難に立ち向かわせてくれることを、目の当たりに経験させてくれるのだと信じている。

トルストイも然り。『戦争と平和』、今後も読み返すことはあるのだろうか。

(2022. 5. 17)

月報 2022 年 9 月号 CONTENTS

- ・千葉寫真館新作展「初秋の花々」(千葉光雄) …p. 1~3
- ・新ゼーニ・オルガンのピッチについて (小海 基) p. 2
- ・おたより (菅原文子/佐藤啓子/大村璃杏) …p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [19] (大野博人) …p. 4

荻窪教会に入ったアンドレア・ゼーニ オルガンのピッチについて

小海 基 (団員、荻窪教会牧師)

ちょうど東京バッハ合唱団の創立 60 周年演奏会(第 120 回定期)への最後の仕上げをしていた今年 5 月の連休に、荻窪教会に新オルガンが入りました。舞台裏としては、練習とオルガン搬入・組み立てのスケジュールがかち合ってしまうのか、ハラハラしたのですが、うまく行きました。北イタリアのドロミテ溪谷(かのストラディバリは、ここで育った木材でヴァイオリンの名器を作りましたが、このオルガンにもその木材が使われています!)に工房を構えて 25 年目になる、アンドレア・ゼーニ製作の 59 台目の 10 ストップのオルガンです。ゼーニ氏は今年で還暦を迎えました。

さて、新型コロナ禍に阻まれてなかなか来日できなかったゼーニ氏でしたが、この夏にようやくそれが果たせ、このオルガンの最低限の調整と解説を 7 月末の荻窪教会修養会でしてくれました。合唱団からもアルトの風岡さんが参加してくれました。もっとも今回の来日スケジュールでは日本に 15 台以上もある彼のオルガンのメンテナンスに追われ(杉並区内の修道院にももう 1 台ポジティブがあります)、今回はあくまでも「最低限」の調整にとどまっています。来春に 2 人かがりて 2 日間かけて正規の最終的「整音」がなされます。その時に現在の $a=415\text{Hz}$ (カンマートーン) からほぼ半音高い 440Hz に変える作業も行われ、現代のオーケストラ楽器とのアンサンブルも可能になります。

合唱団の皆さんの中には、荻窪教会のこれまでのオルガン(1973 年にパウル・オットの制作したポジティブ)のような $a=440\text{Hz}$ の楽器で練習することに慣れてきたので、今回の楽器のようなバロックピッチでの練習に戸惑われる方もいるのではないかと思います。特に最近マスコミでもてはやされている「絶対音感」を持っている方は、頭の中で計算しながら苦労して練習を続けておられると思います。もっとも $a=$

440Hz が一般的になったのはせいぜいのところ 20 世紀になってからのことで、最近のピリオド楽器を使っての古楽演奏では、様々なバロックピッチが用いられ、録音されていることは皆さんもご存じだと思います。古いヨーロッパのオルガン管楽器を調べると、今回の荻窪教会に入ったゼーニ・オルガ

ンのような $a=415\text{Hz}$ のカンマートーンの楽器が点在していました。バッハの譜面で見ても少年の歌声としてもやたら高い声域で書かれているのは、実は実音では半音低かったのではないかという説が昔からありました。アーノンクールも、バッハのカンタータ録音をリングと競って進める際に、苦労して入手した古い管楽器のピッチからカンマートーン採用を決断したと『自伝』で告白しています。しかし、管弦楽器のその後の発展(?)に伴い、背景には演奏会場がそれまでの宮殿や教会からコンサートホールに変わっていった、大聴衆を集めてのピッチも高い派手な演奏が好まれる傾向が拍車をかけるのですが、18 世紀当時になるとほぼ北ヨーロッパ全域で現在よりも半音近く高い $a=465\text{Hz}$ のコーアトーンが席卷するような事態になります。パイプオルガンは図体が大きく、全部の笛を短くするのは、世界大戦で多くの楽器が破壊され再建を余儀なくされる時代まで、こうした時代の波に乗り遅れていくことになります。やがて 20 世紀にようやく、中間を採ったわけでもないでしょうが $a=440\text{Hz}$ のピッチで揃えていくことになります。

私自身は「絶対音感」を持っているわけでもないの、 $a=415\text{Hz}$ のカンマートーンに心地よさも感じています。このピッチで不均等調律で各調を歌い比べると、なるほどバッハが肝心な勝負所でロ短調を選んだのは「こんな響きの色を求めていたのだな」ということをうっすらと感じる思いがするからです(調性で色彩まで感じていたスクリャービンまでの感性は私にはありませんが……)。ゼーニ氏に聞くと、 $a=415\text{Hz}$ の管と 440Hz 、 465Hz の管では微妙に作り方も違っているとのことで、彼は作りとしてはこのままカンマートーンで行ってもらいたいというのが本音のようです。現代楽器とのアンサンブルを必要しているグループは東京バッハ合唱団以外にもあるので、春には $a=440$ で調整しようという事を決断しました。団友の田中克彦一橋大学名誉教授や故永六輔氏が指摘するように、フランスがメートル法を世界標準化させようとして尺貫法が駆逐されたり、中国やソ連が力づくで汎モンゴル主義を封じ込めて分断するのは私も好まず、多様性がある世界であるべきだとも思うのですが……。鈴木雅明氏のバッハ・コレギウム・ジャパンは、最近《マタイ受難曲》演奏のために $a=415\text{Hz}$ ばかりでなく 440 、 465 だけでなくいろいろなピッチに対応できる楽器を作ったという事ですが、そもそもそんな楽器はバロック時代には存在しなかったわけですし、その時代とそれぞれの地域に合わせてオルガンが良い楽器として成長していくのが正しい在り方なのかもしれないとは思っています。

とにかく春までのしばらくの間ではありますが、東京バッハ合唱団の皆さんも、練習で $a=415\text{Hz}$ のバロックピッチと不均等調律の音色を味わい楽しんでみてください。



■荻窪教会のオルガンで歌う光野孝子さん、伴奏は田尻明葉さん [2022/7/2 の記念祝会、千葉氏撮影]



■千葉寫眞館新作展「サギソウ（鷺草）」[2022/8/16、千葉光雄]

お・た・よ・り

コロナ禍の2年半、歌いきりました

菅原 文子（元団員）

第121回定演のご成功おめでとうございます。

小口さん〔ソプラノ団員〕が来場者のアンケート回答集を送ってくださって、お聴きくださった皆さんが待ちに待った定演であったことが伺えました。私の友人も次の日に電話で、アンコールで147番のコラールを歌えてよかったこと、CD〔当日の会場録音〕も希望していました。私は腰痛持ちの友人にはCDをとっていましたが、きっと心に残ってもらえたものと思っています。私は隣の須藤さん〔ソプラノ団員〕が、細かく刻まれた箇所を一音一音、確実にかつリズムカルに歌っていて、それに乗って遅れずに、オケとともに音楽を作れたとき、“よかった”と体で感じ、今回の成功を確信しました。

合唱をもう一度したいと思い、14年振りに復団させていただきましたが、何とコロナが日本に上陸した月〔2020年1月〕で、練習も1,2回ほどで休止となり、出来なくなりました。それから2年半、団員一人ひとりがそれぞれ、自覚をもって、一貫して大村先生のもとにバッハを歌う団を継続してしていくという気持ちと実行力をしっかりと感じることが出来ました。一つ一つのチャンスを生みだし、やり通す。私は《珈琲カンタータ》のソプラノ斉唱の部分、ボイスの先生に2回ほど集中してもらい、責任を果たせたことがうれしかったです。

教会でもやっと聖歌が歌えるようになり、奏楽を担当していても、これが本来の礼拝と感じています。この4月からは地区のお役が回ってきて、初めての事に、アツという間の毎日です。定期演奏会の翌日から、美化運動で担当地域にお花を植えました。演奏会場で、先生から贈られた“黄色のガーベラ”、我が家で元気に咲いています。ありがとうございました。

コロナの中で、色々大変な中でも歌うことができ、幸せでした。どんな時でも、こころよく受け入れて

くださって感謝です。これからは聴く側として、気持ちの上では、バッハ合唱団とともに歩んでいきたいと思えます（2022年6月2日）

[今回公演（5/14）を終えて退団されました]

日本語訳の美しさ

佐藤 啓子（後援会員、元団員）

創立60周年おめでとうございます。

大村先生の日本語訳の美しさに驚いています。

合唱団のこれからの歩みも守られます様、お祈りいたします。（2022年5月10日）

いつも楽しんで読んでいます

大村 璃杏（中学2年）

私は月報をいつも楽しんで読んでいます(๑)

でも私は、音楽にとっても興味があるわけではありません。そんな私がなぜ必ず読んでいるのかというと、自分にはない考えを持っている方の話しを読むのが好きだからです。それは、曲についてのことも、他のこともです!!

私はまだ13年しか生きていないので、知っていることも、した経験も少ないとも思います。なので、知らないこと、新しい捉え方を知ることのできる月報はとてもおもしろいです(๑)



この前の月報〔2022年5月号〕の、最近のニュースから考えていっていた恵美子先生の記事では、今と昔での良い方へ変わったこと、悪い方へ変わったこと、それぞれに気付くことができました。

私にとって、新しい気付きをくれるバッハ合唱団の月報は大切です!! これからも発行、お願いしますね!



■千葉寫眞館新作展「アキバラ（秋薔薇）」
[2022/8/16、千葉光雄]

日常と非日常

安曇野閑人 大野 博人

この夏、自分が暮らしているのは、たくさんの人が休暇で訪れる場所なのだとすることをあらためて意識した。

品川、多摩、横浜、大阪、名古屋……。

お盆休みとその前後、安曇野には県外ナンバーの車が急に増えた。コロナ禍は続いているけれど、重症化する割合が下がって、旅行自粛の呼びかけもない。2年あまり、がまんしていた人たちがどっと繰り出しているようだ。

それほどメジャーな観光地ではないから、そこら中で渋滞発生というわけではないものの、いつもよりぐっと交通量が多い。ふだんは待たされることもないそば屋の前に長蛇の列ができていたり、しゃれたカフェのランチタイムが予約で満席だったり。

日々の買い物で利用している近所の小さな店には、地元の農家の野菜や果物が置いてある。安い新鮮でおいしい。その駐車場も県外ナンバーの車であふれていた。いくつかの野菜や果物が午前中に売り切れる。

山ぎわの森の中にある拙宅の近所にはリゾートホテルや旅館も点在する。家の前の道にも、泊まり客たちが散歩する姿が目立った。宿で「念のため」と渡されたのだろう、熊よけの鈴をチリンチリンと鳴らしながら歩いている。

どうやら自分たちはいささか変わったところに住んでいるらしい、と気づく。自分にとっては日常の場所が、ほかの人にとっての非日常の場所なのだ。不思議な気分だ。

観光客とともに安曇野に日常がもどった、というべきか、非日常がもどった、というべきか。

コロナ禍の影響は、田舎のこのあたりでも小さくはなかった。

人が都会ほど密集して暮らしているわけではない。感染の広がりとはそれほど深刻にはならない。けれども、観光地としては打撃があった。

歩いていけるところにあった安曇野アートヒルズミュージアムは2020年の年末に閉館してしまった。広い敷地とモダンな建物で地域のちょっとしたランドマークになっていた。中にはエミール・ガレの作品を展示した小さな美術館やガラス工芸の体験スペース、安曇野の田園風景が見わたせるイタリアンレストラン、売店などが入っていて、楽しい空間だった。しかし、コロナ禍による客足の激減に耐えきれなかったらしい。

それだけではない。よく知られたパン屋やそば屋も閉店を余儀なくされた。

どうやら、ガイドブックやネットで名前が知られた施設や飲食店ほど、打撃が大きかったようだ。客の大



■ 近くのカフェからのながめ。これは日常的？ それとも非日常？
(写真・解説とも筆者)

半が観光客というところだ。地元の人たちが使っているパン屋や商店はなんとか生きのびている。

コロナ禍で揺さぶられたのは、安曇野の日常ではなく、非日常だったということかもしれない。

音楽会も少しずつ戻ってきた。

先日、松本での久しぶりのオーケストラ・コンサートで、チェリストの宮田大がドヴォルザークのコンチェルトをあざやかに演奏したあと、不思議な小品をアンコールで弾いた。宮沢賢治の「星めぐりの歌」のところどころにバッハの無伴奏チェロ組曲のフレーズが浮上する編曲。

野良仕事をしながら口ずさむような素朴な旋律と、天空に舞い上がっていくような高貴なアルペジオ。美しい音で、日常と非日常が重なるみたいに響き合う。

日常と非日常の境目を行ったり来たりしているようだった。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)

【編集後記】

・上掲の写真、雲のかなたの山並みに向かって据えられたベンチ。いつか、ここに座ってコーヒーを一杯、といった日が訪れるのでしょうか？

・さて、千葉寫真館の館主が「初秋の花々」を撮りに、ひさびさにお出かけになったようです (p. 1、3)。半年前の休館の事情をお読みになった [月報 2022年3月号 (No. 717)] 写真ファンの方々は、さぞやほっとなさることでしょう。めでたし、めでたし。

・前号あたりから登場している、土曜の練習会場 (荻窪教会) の新設オルガンについて、小海牧師に寄稿していただきました。近ごろどういう分けか、高い音域が楽に出るようになったなあ、練習の成果だ、と喜んでいました。あなた、ピッチのせいだったのですよ。

・「おたより」の3通は、いずれも頂いてから時間がたってしまいました。ご勘弁ください。元団員の菅原さんからのお便りにある、コロナ禍の2年半は、団内外のどなたにとっても、これまで経験したことのない、鬱陶しい日々だったはず。公演の中止という前代未聞の経験もしました。忍耐、工夫、挑戦……、どなたか、いずれ総括をお寄せください。

・ご寄稿のみなさんに、こころよりの御礼を (K)